

はじめに

## 1 明治大学図書館所蔵『源氏物語』関係写本

伝九條種通筆『源氏物語』写本54帖揃 室町後期・江戸初期

『河海抄』江戸期写本

『花鳥余情』江戸期写本

『源氏物語聞録』徳島藩源氏物語講義録

大本と枳形本

## 2 紫式部について

紫式部像—石山寺・宇治市・武生市紫式部公園

生年 970年頃生まれる

27、8歳頃 父為時、越前守赴任に伴い越前国府（現武生市）に暮らす

28、9歳頃、藤原宣孝と結婚、翌年賢子誕生

35、6歳頃、一条天皇の中宮彰子に仕える—源氏物語清書本の制作（1008年）

没年 45歳頃、60歳頃

## 3 一条天皇・藤原道長、中世の公家の読み方—延喜天曆准拠説

一条天皇 「この人は日本紀をこそ読みたるべけれ。まことに才あるべし。」（『紫式部日記』）

藤原道長 「すきものと名にし立てれば見る人の折らで過ぐるはあらじとぞ思ふ」

（『紫式部集』）

『河海抄』料簡

\*まことに君臣の交わり、仁義の道、好色の媒、菩提の縁にいたるまで、これをのせずといふことなし。その趣、莊子の寓言に同じきものか。言葉の妖艶さらに比類なし。

\*物語の時代は醍醐・朱雀・村上、三代に准ずるか。桐壺御門は延喜、朱雀院は天慶、冷泉院は天曆、光源氏は西宮左大臣、かくのごとく相当するなり。→延喜天曆聖代観

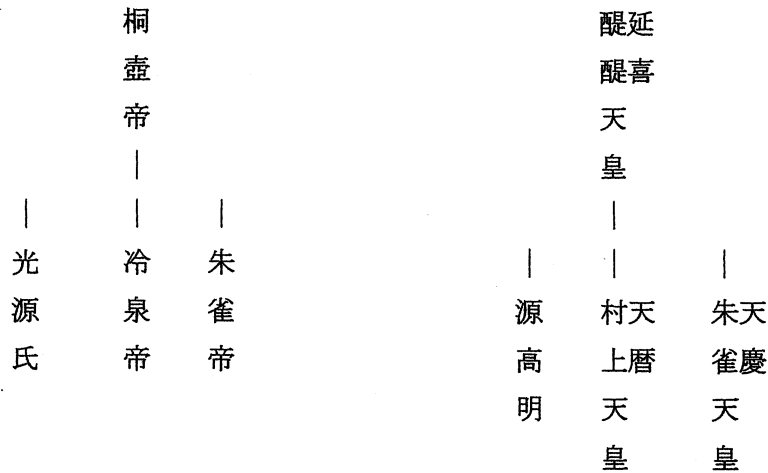
## 4 光源氏の王権譚—運命の物語

\*そのころ、高麗人の参れる中に、かしこき相人ありけるを聞こし召して、宮の内に召さむことは宇多の帝の御誠めあれば、いみじう忍びて、この皇子を鴻臚館に遣はしたり。御後見だちて仕うまつる右大弁の子のやうに思はせて率てたてまつるに、相人おどろきて、あまたたび傾きあやしむ。「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人

の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷のかためとなりて、天の下を輔く方にて見れば、またその相違ふべし」と言ふ。(桐壺巻)

→「帝王の相」を持ちながら臣下に下った光源氏は、いかにして「帝王の相」を成就するのか。一父桐壺帝の妃・藤壺と密通し、不義の皇子が冷泉帝として即位する。世間には秘密にされているが、源氏は天皇の父として、准太上天皇になる。

\* \* \*



### 5 光源氏の恋愛と結婚

母 桐壺の更衣 桐壺帝の更衣、光源氏の母。源氏三歳で死別。

桐壺帝 たづねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく (桐壺巻)

→「長恨歌」を踏まえる。楊貴妃を亡くした玄宗皇帝の悲しみに同情した道士が亡き楊貴妃の在りかを探し当てて、形見の品を皇帝に持ち帰る。

「七月七日長生殿 夜半人なく私語の時 天に在りては願はくは比翼の鳥となり 地に在りては願はくは連理の枝とならむ 天長地久 時有りて尽くとも 此の恨みは綿々として尽くる期なけむ」(「長恨歌」)

義母 藤壺女御 桐壺帝の妃、後に中宮。冷泉帝の母。源氏18歳春密会。

源氏 見てもまた逢ふ夜まれなる夢のうちにやがてまぎるるわが身ともがな

藤壺 世がたりに人や伝へむたぐひなく憂き身をさめぬ夢になしても (若紫巻)

源氏 逢ふことのかたきを今日にかぎらずは今いく世をか嘆きつつ経ん

藤壺 長き世の恨みを人に残してもかつは心をあだと知らなむ (賢木巻)

正妻 葵の上 左大臣の姫君、源氏12歳元服の添臥の妻。政略結婚。夕霧を産む。

六条御息所の物の怪に襲われて亡くなる。26歳

源氏 のぼりぬる煙はそれと分かねどもなべて雲居のあはれなるかな (葵巻)

妾・正妻 紫の上 式部卿の宮の姫君、藤壺中宮の姪。光源氏の生涯の伴侶。

源氏 大空をかよふ幻 夢にだに見えこぬ魂の行方たづねよ→「長恨歌」

源氏 かきつめて見るかひもなし藻塩草おなじ雲居の煙とをなれ

源氏 もの思ふと過ぐる月日も知らぬまに年もわが世も今日や尽きぬる (幻巻)

妾 花散る里 控えめでしっかり者の妻。夕霧の後見。  
妾 明石の君 明石入道の娘。源氏とは母方のまたいところ。明石中宮の母。  
源氏 みをつくし恋ふるしるしにここまでもめぐり逢ひけるえには深しな  
明石君 数ならでなにはのこともかひなきになどみをつくし思ひそめけむ (滯標巻)  
正妻 女三の宮 朱雀院の内親王、藤壺中宮の姪。源氏40歳の時、降嫁。時に14、5  
歳。紫の上の悲嘆。柏木と密通して薫を産むが、密通が発覚して出家。  
紫上 目に近く移ればかはる世の中を行く末とほく頼みけるかな  
源氏 命こそ絶ゆとも絶えめ定めなき世の常ならぬなかの契りは  
女三宮 はかなくてうはの空にぞ消えぬべき風にただよふ春のあは雪  
(若菜上巻)

愛人 六条御息所 前皇太子の妃、秋好中宮の母。源氏の冷淡に傷つき伊勢に下る。  
御息所 袖ぬるるこひちとかつは知りながら下り立つ田子のみづからぞ憂き  
源氏 浅みにや人は下り立つわが方は身もそぼつまで深きこひちを (葵巻)  
愛人 空蟬 故中納言・衛門督の娘。桐壺帝に入内を計画していたが、父の死により取り  
やめ、老受領・伊予介の後妻になる。源氏17歳夏の恋  
源氏 帚木の心を知らで園原の道にあやなくまどひぬるかな  
空蟬 数ならぬ伏屋に生ふる名の憂さにあるにもあらず消ゆる帚木 (帚木巻)  
愛人 夕顔 故中納言の娘、頭中将の愛人。玉鬘の母。頭中将の正妻の脅迫に恐れて身を  
隠していた時、源氏と出会う。物の怪に襲われて急死。源氏17歳秋の恋。  
源氏 優婆塞が行ふ道をしるべにて来む世も深き契りたがふな  
夕顔 前の世の契り知らるる身の憂さに行く末かねて頼みがたさよ (夕顔巻)  
愛人 末摘花 故常陸の宮の姫君、馬面顔で赤鼻の醜女。口が重く歌も詠めない不器用な  
人柄。源氏は気の毒になり生涯世話をする。故常陸の宮の靈魂が末摘花の身の上を  
案じて、自分を末摘花に引き合わせたのであろうと、源氏は思う。  
源氏 いくそたび君がしじまに負けぬらんものな言ひそと言はぬ頼みに  
源氏 朝日さす軒のたるひは溶けながらなどかつららの結ぼほるらむ  
(末摘花巻)

愛人 朧月夜の尚侍 朱雀帝に入内する直前に光源氏と逢ったために、正式の妃になるこ  
とができず、入内後も源氏と密会を重ね、発覚して、源氏は須磨に流謫する。  
朧月夜 うき身世にやがて消えなばたづねても草の原をば問はじとや思ふ  
源氏 いずれぞと露の宿りをわかむまに小篠が原に風もこそ吹け  
(賢木巻)

恋人 朝顔 故式部卿の宮の姫君。源氏のいとこ。源氏の求婚を最後まで拒む。  
恋人 玉鬘 夕顔と頭中将の娘。光源氏の養女。源氏は求婚するが、最後は断念する。